

## 第9回 マグナグラエキアの震災 – ピタゴラス的生き方の終焉とローマ帝国

決まったことを毎日繰り返し、平穩に質素な生活を営む。そして数学や音楽を通じて自然との調和、輪廻転生、天体の真理を追求し議論するという「ピタゴラス的生き方」。紀元前6世紀にエーゲ海トルコ沿岸のサモス島から南イタリアのクロトンに移り住んだピタゴラスは、多くの若者の心をつかみ集団生活で自らの思想を実践する教団を結成した。



マグナ・グラエキアの植民都市（地名表記は一般的な日本語読みとした）

イタリア半島南部はマグナ・グラエキア（大ギリシア）と呼ばれるほど紀元前700年頃からギリシア人が多く植民した場所で、温暖な気候と豊かな土壌のため、小麦・ブドウ酒・オリーブ油の生産で富んでいた。クロトンを中心とするイタリア半島最南端のカラブリア地方、その北部に位置するカンパニア地方（ポンペイやナポリなど）そしてシラクサを中心としたシチリア島は広大な土地の豊かさにおいてギリシア本土をはるかに上回っていたのである。

「万物は数字（自然数）からなる」というあまりにも規範的なピタゴラスの思想は、その政治的支配力が増すとともにクロトン市民の嫌うところとなり、ポリス（都市国家）への反逆者として断罪される。しかしその思想はヘレニズム時代へ引き継がれ、やがてプラトンやアリストテレスの自然学へ大きな影響を与え、ユークリッド幾何学の礎となった。19世紀末にカンパニア・カラブリア地方を訪れたイギリス人作家、G.ギッシングは古代のギリシア的・ピタゴラス的生き方の思い出を詩情豊かに描いているが、中世から近代へかけてしばしば起きた地震のために古代の町が失われたことも忘れていない。マグナ・グラエキアは火山噴火と地震が頻発する地帯でもあったのだ。ピタゴラスのいた頃、シチリア島からナポリにいたるマグナ・グラエキアには壮麗なギリシア神殿が多くあり、特にクロトンの岬にはイオニア海を航行する船にとって目印となるヘラ神殿があったという。あの規則正しく列柱が立ち並び、三角屋根を支えるギリシア神殿の姿は、ピタゴラスの幾何学、調和を重んじる思想が具象化されたものかもしれない。逆に古代ギリシア人の性格と生き方、政治体制（ポリス）がピタゴラスやユークリッドの幾何学を育んだというべきか。

紀元前2世紀、ハンニバル率いるカルタゴ軍との死闘に勝利したローマは、マグナ・グラエキアを含むイタリア全土の政治的支配を確立し、しだいにローマ風の町づくりに変貌していった。紀元が変わる頃、ローマはスペインからギリシア本土やナイルデルタ、そしてシリア・パレスチナを含む地中海全域を手中にしてローマ帝国となった。かつてのマグナ・グラエキアの北限であったナポリには帝国の海軍基地がおかれ、ヴェスヴィオス火山をはさんで東隣のポンペイはローマ帝国貴族の別荘地として発展していった。ポンペイの歓楽的な雰囲気は、後に火山噴火による埋没のため封印された遺跡によって知られている。ローマ帝国時代に入っても、マグナ・グラエキアの古代ギリシア的文化が未だ色濃く残っていたであろう。破局は初代皇帝から数えて5代目のネロ（在位54–68年）の時代に起こった。

哲学者セネカ（ネロの家庭教師だった）によれば、ヴェスヴィオス火山噴火（79年）に先立つ62年、ポンペイは大地震（メリカリ震度階級でIX、気象庁震度階級で6相当の地震規模）に見舞われた。地震で多くの家屋が倒壊し、特に水道設備やテルマエ（浴場）が壊滅的な被害を受けた。地震直後には皇帝のネロも視察にポンペイまで出向き、「ここは危険なところだから町を捨てて他へ移転するよう」住民たちに勧告した。しかし、ポンペイの住み心地の良さは住民たちに退去・移転へ向かわせず、再建の道をとることになったという。よもや17年後にヴェスヴィオス火山が大噴火して町全体が埋没するとは誰も予想していなかっただろう。ローマ帝国では住宅の自力再建が原則だったので、帝国が再建したのは公共施設のみだ。ローマ帝国最古といわれるポンペイの共同浴場や円形闘技場は震災復興で建てられたものだが、かつてイタリア南部を席卷したギリシア建築の古典的規範、ピタゴラス的生き方は失われつつあった。にもかかわらず先進的なヘレニズム文化に対するローマ人の憧憬は深く、ギリシア美術の模倣と新技術にもとづく新しいローマ帝国の社会へ移行する。



メタポントに残るマグナ・グラエキアの神殿跡（1993年撮影）

（参考図書）

- M.フィンレー（山形和美訳）「古代ギリシア人」（法政大学出版会）1989年
- セネカ（茂手木元蔵訳）「自然研究（全）」（東海大学出版会）1993年
- G.ギッシング（小池滋訳）「南イタリア周遊記」（岩波文庫）1994年
- A.Nur “Apocalypse” Chapter 3（Princeton University Press）2008年
- イアンブリコス（水地宗明訳）「ピタゴラス的生き方」（京都大学出版会）2011年